

巻頭言

現代宗教研究とは

赤堀 正明

芭蕉は句作の理念に「不易」と「流行」を説いた。その意趣は「不易」は「流行」の中により、「流行」は「不易」によって、流行たり得るとする。

日蓮宗現代宗教研究所は、創価学会をはじめとする新宗教対策として一九六四年に設置されている。その意味では、旧宗教から見た新宗教の研究を行う施設との位置付けも可能となる。

宗教学者の井上順孝氏が興味ある論文を著わされている。

平成二七年度公開学術講演会

『現代宗教は古代宗教と何が違うのか?』

— 宗教進化論考 —

(『國學院大學研究開発推進機構紀要』第八号 平成二八年三月)

その初めに、

宗教は歴史的に多様な展開をし、今日の状況を生むに至っている。日本の宗教文化という観点からすると、現代宗教の多様性とそこに至るダイナミズムはどう捉えられるか。

ダーウインの進化論が持っていた意味、特に淘汰という概念を再考し、二〇世紀末から急激に展開した脳科学や認知科学の研究を参照して、新しい研究視点を提示することを試みる。(中略)

宗教進化論の従来の考え方とは違う議論をするために、……私はむしろ進化に働く淘汰ということを重視していきたいと思います。……今生きているということは、それぞれがみんな進化したということです。これは宗教文化を考える上でも非常に大事なことで、あえてここで申しておきたいと思います。

氏は宗教教団も淘汰され、進化した教団が現在生き残っていると把握されている。

言い換えれば、時代の変化に対応し続けることができた教団だけが、今日残っているということになる。残っているといっても、残滓としてしか見られていない教団もあり、少なくともなんらかの存在感を示している教団であろう。

又、氏は研究の視座を古代から現代に置換することを提言される。この視点に立てば、日蓮宗を含む法華系教団の多様性は現実に対応するための多様化として捉えられる。

多様化した法華系教団群は紛れもなく現代宗教であろう。

この多様化、芭蕉の云うところの流行中にこそが、日蓮聖人の仏教の現在、しいては法華経の現在、不易を見るのである。

それでは、これらの法華系教団群とは何なのか。

その存在意味を解明することに、日蓮宗に設置された現代宗教研究所の存在する理由の一

つがあると考えられる。

日蓮聖人が教・機・時・国・序の五義判の基準によって現代末法に流布すべき教法を選ばれたのは、教法がどのように変化する時代においても通用する基準を示されたと云える。伊藤雅之氏は、

均質性の薄れた現代社会における宗教性・靈性を理解するためには……当事者たちが、どのように多様な選択肢のなかから自らのアイデンティティにふさわしい信念やシンボルを獲得し、自己の意味世界を構成していくのかの解明が不可欠となる。

（『現代宗教二〇〇一』五八頁）

と現代宗教のもつ一面を析出されている。

続けて、伊藤氏は、「社会状況が現代の宗教性・靈性を理解するためのフィールドになりうる」と見られて茶道・剣道・書道等を挙げられている。

通好な一例を挙げる。

「樹木葬」は初め、墓石を造らない埋葬としてスタートしている。現在はシンボル・ツリの下に簡易な墓石を設け、埋骨するか、花壇の中に埋骨する。花壇葬と名付けても良さそうな埋葬形式（集合墓）となっている。

第十二回お墓の消費者全国実態調査（二〇一一）によれば、「お墓選びで重視した点」は、お墓の種類の中、一般墓二六・九％に比べ、樹木葬は四六・五％と大きく上回っている。では今、何故樹木葬が求められているのであろう。その理由を考察してみる。

先ず、先祖代々を祠る先祖墓は、核家族化や少子化、未婚化が進んだことにより、夫婦墓、個人墓を理想とする傾向の強まりにある。調査でも「やがて跡継ぎがいなくなるため」との声が多い。

二つめは、故人の霊はいつまでも、墓に停とどまると考えるよりも、自然に帰るとのイメージが広がっている点にある。これは調査にも、「自然に帰るイメージが持てたから」との声が多くあった。とされていることから明らかである。

三つめは、墓の維持を簡略にしたいとの思いである。寺墓は、寺と檀家の関係が生じ、寄附等の煩わしさがあることから、敬遠されはじめている。

四つめは、資用が安価で済むことにある。墓石は高額で、建墓に必要な土地も広く要するので高額となる。樹木葬は少量の石で、狭隘な土地でも造設が可能である。

五つめは、先祖供養意識の希薄化にある。

こうした点から、樹木葬は建墓形式で一位となっている。

ここからは三百年続いた檀家制度や家長制からの脱却。家の宗教から個人の宗教への変化。権威の象徴としての墓。先祖崇拜から情愛に基づく建墓への変化に見られるような、宗教よりも人間関係による建墓意識の変容などが指摘される。

著者はかつて現代宗教における神・仏の道具化を指摘した（新・新宗教ハンドブック・まとめ）が、既知のようにスウィドラーの文化概念は多様化した文化を構成するパーツを並び集めて自分自身の「行為の戦術を構成するための資源となる。」としている。

日蓮宗においては、その道具箱の中のいくつかが「パワースポットとしての身延山」や、

「除霊や開運のまじないとして」「セラピーとして」「セレモニーとして」「救いとして」などの宗教的なパーツが入っていて、取り出されることにもなる。

このサム・パーツは「メトニミー（喚喩）」的に理解され、各部分が集まって、喩えられた全体像を形成する。

この像は不確かだが、現代に獲得された宗教に他ならない。

これらがどのように配合されているかで、その教団の特質を形成している。

この漠然と表われた像が法華系の多くの教団として映し出された感もある。

現代に存在するものは意味があつて存在しているという見方が必要な時であり、ここに現代宗教研究の基点が置かれていよう。

当然、分析する主体の立場も問われなければならない。